

第一次大極殿院南面築地 回廊の調査

—第360次

1 はじめに

第一次大極殿院地区は、これまでの調査により、四周を築地回廊が取り囲み、南辺では南門・東西楼などの施設が取りつくこと、奈良時代前半から平安時代初期にかけて大きく三時期の遺構変遷が認められることが明らかにされている。地区東半の大部分は既に調査を終え、その成果は『平城報告XI』(1981年)にまとめられている。本調査は、第一次大極殿院地区南辺の変遷過程を明らかにすることを目的としたもので、南面築地回廊および築地回廊廃絶後に造成される広場景観の変遷にかんする知見をえた。以下その調査概要を報告する。

本調査は、西を1998年度の第296次調査区、東を2001～02年度の第337次調査区にはさまれた南面築地回廊の西南部分を対象とした。調査面積は600㎡(東西24m、南北25m)で、一部既調査区を再発掘した。調査期間は、2003年7月2日から10月3日までである。

2 旧地形と基本層序

調査区を含む南面築地回廊推定地は、1987年度の宮跡整備事業において、基壇範囲に盛土・張り芝による遺構表示がおこなわれている。また、2002年度には、大極殿復原整備にともない、本調査予定地の周囲に、工事用地確保のための盛土(約35～40cm)がおこなわれた。

発掘前の旧地表面は、北から南へなだらかに傾斜し、調査区北端で標高68.4m、南端で68.1mを測る。東西方向の盛土は、標高約68.4～68.3mでほぼ水平である。

基本層序は次の通り。築地回廊の北では、張り芝および上面が表土化した黄灰色・灰色砂の整備盛土(上面標高約68.4m、以下同)、旧耕作土(約68.1m)、黄灰褐色・暗灰白色土の旧床土(約67.9m)、暗茶褐色土ベースの礫敷と礫・瓦片混り茶灰白土(約67.7m)からなる。築地回廊の南側は一段低い水田にあたり、整備盛土、旧耕作土(約67.6m)、灰褐色・灰茶褐色土の旧床土(約67.4m)、暗茶褐色粘質土ベースの礫敷(約67.3m)からなる。

遺構検出は、築地回廊南北の礫敷ないし茶灰白土(約

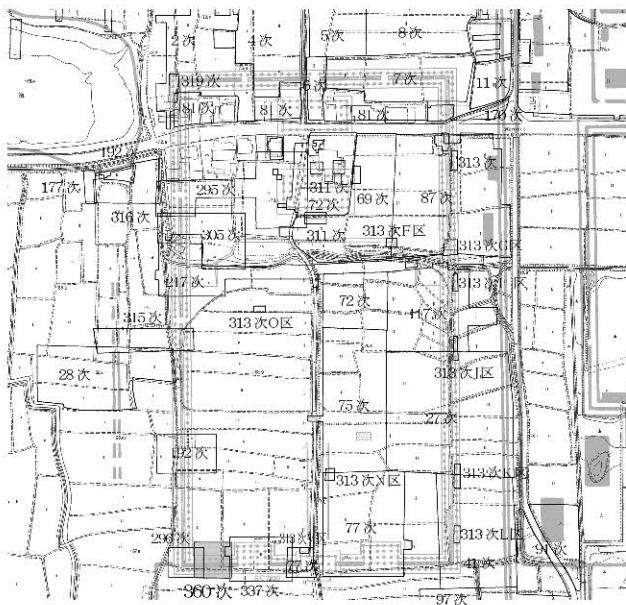


図48 第360次調査位置図 1:5000

67.8～67.7m)でおこなったが、これらの礫敷は奈良時代後半の遺構と推測されるため、第296次調査区およびその北側延長部分(調査区西端の約4分の1に相当する)では遺構の保存に努めた。また、築地回廊の南では、同様の観点から調査区西半の礫敷を保存し、調査区東半のみで下層遺構の検出をおこなった。

築地回廊部分では、礫敷を除いた黄灰褐色ないし橙灰褐色粘質土(約67.7m)でさらに遺構検出をおこなった。大極殿院内庭広場部分は、礫敷を除いた暗茶褐色粘質土の瓦溜り、および礫混り灰茶色砂質土の上層礫敷(約67.7～67.6m)で遺構検出を行い、必要に応じてさらに下層の遺構を検出した。

3 遺構

南面築地回廊(以下、築地回廊)とこれにともなう雨落溝などの遺構、大極殿院内庭の広場(以下、内庭広場)、築地回廊南側の朝堂院の広場(以下、朝堂院広場)などを検出した。本節では、時期区分にしたがい、検出した遺構を説明する。なお、第一次大極殿院地区の変遷は、『平城報告XI』で示された時期変遷案が妥当であり、本調査の見解もこれを追認するものである。したがって、以下の時期区分に、対応する時期を併記することとする。

A期(I-1期)

大極殿院の南面築地回廊がつけられる時期である。南面築地回廊S C7820 第一次大極殿院の南を区画する築地回廊である。第296次調査(『年報999-III』)で西南隅を、第337次調査(『紀要2003』)で西楼に取りつく西端を

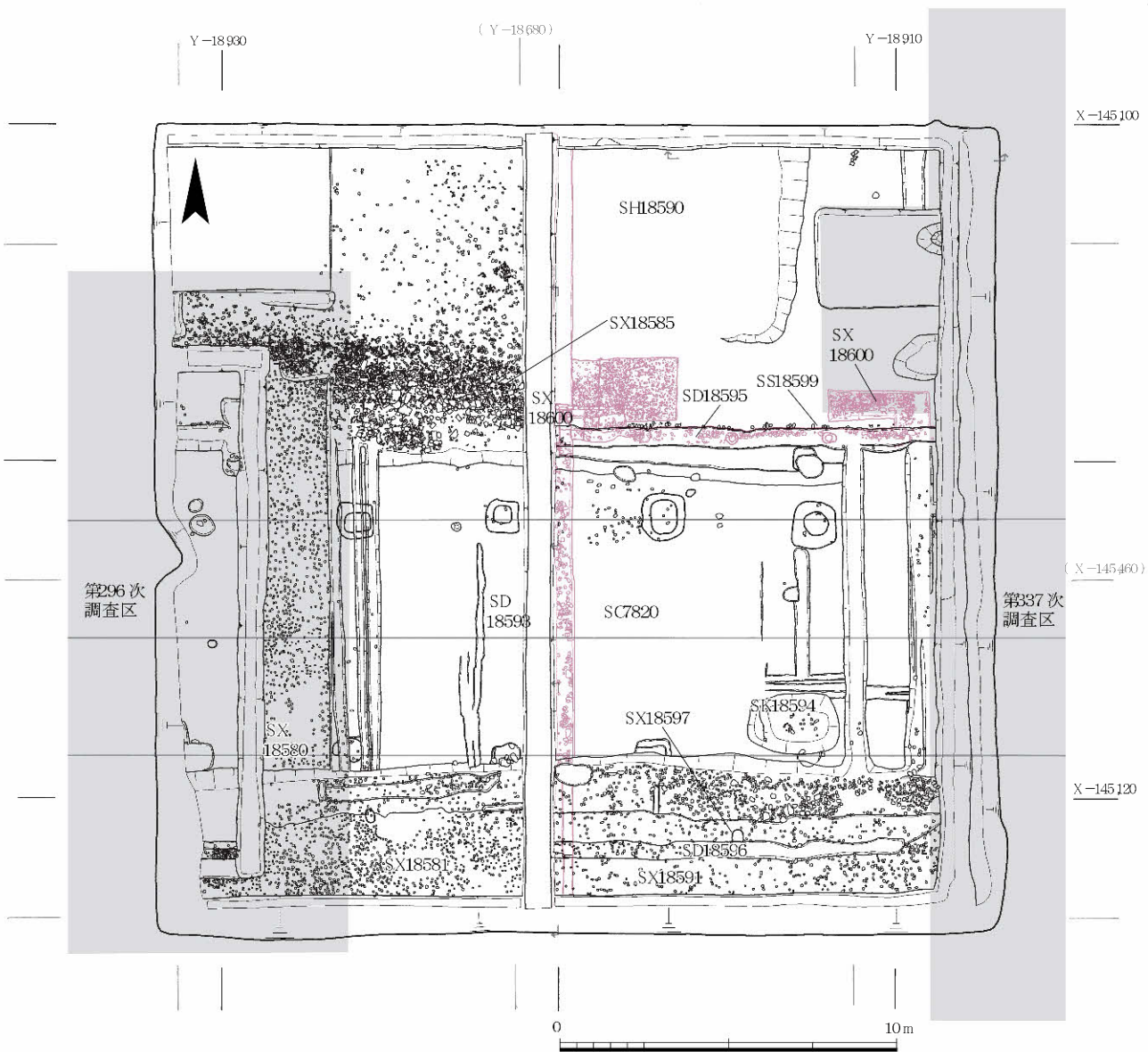


図149 第360次調査遺構平面図 1:200

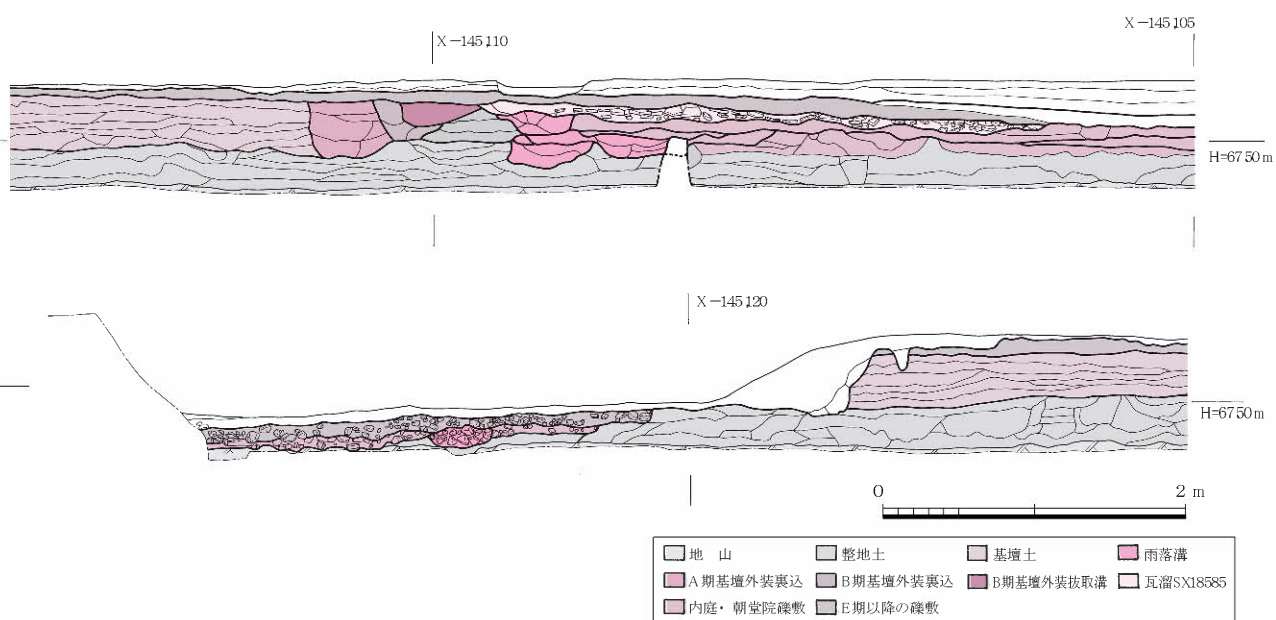


図150 調査区中央南北断面図(部分) 1:50

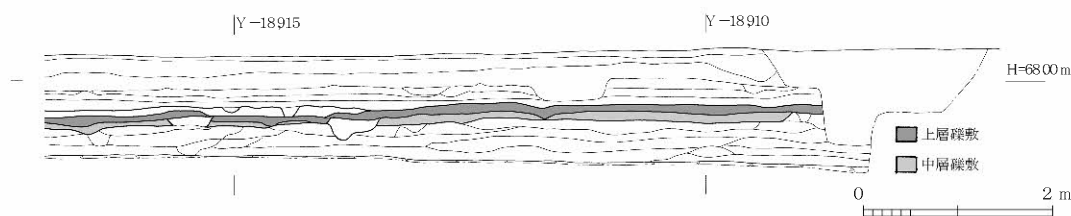


図51 内庭部東半東西断面図 1: 80

検出している。今回は柱穴10基(西端の2基は第296次調査で既検出)4間分を検出した。調査区をつらぬき東西の既調査区に延びる。築地回廊の上部は内庭広場の上層礫敷の高さまで削平されている。基壇版築の一部、礎石据付穴・抜取穴のほか一部の礎石穴に根石が残存していた。なお、築地回廊南柱列より南の基壇は、後世の水田耕作により削平されている。

第77次調査と、第337次調査の東半では、基壇の掘込地業が確認されていた。今回の調査区では、基壇の掘込地業は認められない。第296次調査の知見が追認され、西楼以西の築地回廊には掘込事業がみられないことを確認した。

次に、整地土の状況を調査区全体について概観する。基壇造成前に、青灰色粘土の地山上に厚さ30 cm程度の暗黄灰褐色や暗灰褐色粘質土の整地土を敷く。整地土は築地回廊および南雨落溝の部分では、調査区のほぼ全体で確認された。ただし、南雨落溝以南の整地土は、様相が異なる。調査区中央以東では、地山上に直接礫が敷かれ整地土は認められない。それに対して、調査区西端から約9 mの地点から、厚さ約7 cmの暗黄褐色粘質土の整地土が確認される。調査区南端では、地山の上面は西に向けてなだらかに傾斜している。傾斜部分に整地土を積むことで、礫敷面を概ね水平に保っているようである。朝堂院広場礫敷面の標高は64.15 m~64.20 mを測る。

なお、第337次調査で確認された木簡などの木製遺物を含む黒褐色ないし暗灰褐色粘質土の整地土は、本調査区では部分的に確認したのみである。調査区東端の排水溝で北から約14 m分、調査区北端に設けた東西方向の断割トレンチで東から約3.5 m分確認されたほか、同断割トレンチで部分的に確認したにすぎない。中央の南北断割トレンチでは砂混り暗灰褐色粘質土が一部認められたのみである。調査区の南ないし西半では、黒褐色ないし

暗灰褐色粘質土の整地土は検出されなかった。

基壇部分では、整地土の上面に人頭大程度の石を敷く。この石は、調査区東半では顕著だが、調査区中央の断割トレンチ以西では密度が薄く大きさも小振りとなる。西端の断割断面では希薄である。残存している基壇土は約30~40 cm程度で、厚さ5~8 cm程度の黄灰褐色・灰褐色粘質土や灰褐色砂質土を積み重ねている(図50)。

築地回廊の基壇外装はすべて残存しない。礎石据付穴は、一辺約0.8~1.4 m程度の方形で、残存する深さは最大で25 cm程度である。柱の礎石はすべて抜き取られる。ただし、少なくとも1基の礎石据付穴に、根石と思われる径約20~30 cmの石が数個残存していた。

SD18595A 築地回廊の北に設けられた雨落溝である。北雨落溝SD18595は広場の改修に対応して三時期確認した。A期(下層)の北雨落溝SD18595Aは築地回廊に平行する東西溝で、第296次のSD17941A、第337次のSD18510Aと一連のものである。ただし、上層の雨落溝および内庭広場の遺構に覆われるため平面では検出していない。調査区東端・中央・西端の三ヶ所の断割断面で、幅約45~55 cm、深さ約15~30 cmを測る。

SD18596A 築地回廊の南に設けられた雨落溝である。下層の溝SD18596Aは、西断割断面で確認した。上層の南雨落溝SD18596Bの溝底直下にあり、幅約37 cm、深さ約8 cm確認できる。築地回廊基壇の南側ではこれまで改修の痕跡は認められず、南雨落溝の確たる検出事例に乏しいことから、この遺構が属する時期は詳らかにしえない。ただ、後述するように築地回廊南側、朝堂院広場の礫敷が少なくとも二層確認されており、南雨落溝SD18596Bは下層礫敷を切っていることから、下層の溝はA期に属する可能性が高い。

足場穴列S18599 後述する上層の北雨落溝SD18595Cの埋土を完掘し、さらに溝底にみえる中層の溝SD18595

表22 大極殿院南面築地回廊 遺構番号対照表

	南面築地回廊	北雨落溝 (下層)	(中層)	(上層)	南雨落溝 (下層)	(上層)
296次	SC7820	SD17941A	—	SD17941B	—	SD17965
360次	SC7820	SD18595A	SD18595B	SD18595C	SD18596A	SD18596B
337次	SC7820	SD18510A	—	SD18510B	—	—
	内庭広場 下層礫敷	内庭広場 中層礫敷	内庭広場 上層礫敷	内庭広場 II期以降礫敷	朝堂院広場 下層礫敷	朝堂院広場 II期以降礫敷
296次	SX17942A	—	SX17942B	SX17943	—	SX17944
360次	SH18590A	SH18590B	SH18590C	SX18580	SX18591	SX18581
337次	SH6603A	SH6603A	SH6603A	SX18511	—	SX18512

B埋土の礫を取り除いた面で検出した。約2.8mの間隔で3基、2間分を検出した。柱穴の径は約35～40cmで、3基とも埋土の状況は酷似する。柱穴断面の断割所見では下層雨落溝との重複関係は認められず、出土瓦の所見から、B期における築地回廊SC7820の改修は基壇外装の据え直しに限られる。よって、SS18599は築地回廊解体にともなうものではなく、A期の造営にともなう遺構である可能性が高い。なお、朝堂院広場でも柱穴を検出している。SX18597は礫敷の下層、南雨落溝SD18596Aの下層で検出した、径約30～50cmの柱穴である。これも足場穴の可能性はあるが性格は不詳。

広場S H18590A 内庭広場の礫敷である。これまでの調査で確認されている三層の礫敷のうち、もっとも下層のものである(下層礫敷)。上面の標高は約67.45m。基壇部分の整地土上面の礫とほぼ同じレベルである。第337次調査の所見から下層礫敷と判断したが、礫の残りは悪い。上層ないし中層の礫敷に覆われており、平面的には検出していない。

広場S H18591 朝堂院広場の礫敷。二面確認された礫敷のうち下層にあたる。平面検出では二層の礫敷の識別は困難を極めるが、前述した南雨落溝との重複関係から朝堂院広場の礫敷は二面と判断した。暗茶褐色粘質土に径約5～10cmの礫を敷きつめ、瓦片をごく少量含む。

B期(Ⅰ-2・3期)

大極殿院に東西楼が増築され、内庭広場が中層礫敷に改修される時期である。

広場S H18590B・見切石列SX18600 茶褐色粘質土を約10cm敷いて盛土をほどこし、径約5cmの礫を敷く(中層礫敷)。礫上面の標高は約67.50～67.55m。基壇北側の外装抜取溝の南端から約1.7m北に見切石列SX18600がおかれ、これより北の内庭部分に礫が敷かれた。見切石列は上層の雨落溝と礫敷に覆われるため、調査区中央付近と東端でのそれぞれ約3m分で平面的に確認したほか、西断割断面の精査によりこれに相当する石を検出したのみである。しかしながら、調査区の中央付近、および東西端の推定箇所ですべて見切石列と思われる石列を確認できたので、少なくとも西楼より西の築地回廊全体に存在したと推定する(図52・153)。

また、内庭の礫敷は地形に沿って南北に傾くとともに、西楼基壇にとりつく形で、東にもレベルをあげていく

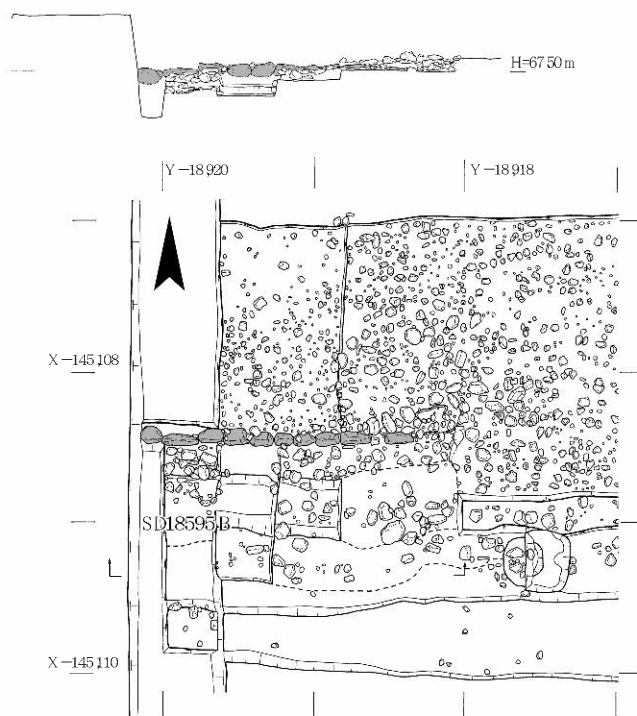


図52 見切石列SX18600 1:50

(図51)。傾斜のはじまりは西楼の推定西柱列からおおよそ10.7mの地点で、そこから約1.5m東では礫敷上面で15cm程度あがっている。

SD18595B 西楼の増築・内庭礫敷の改修にともない、南面築地回廊北側では基壇外装を据え替える。またこれにともない下層の北雨落溝SD18595Aが埋められ、あらたにSD18595Bが掘られた。この溝は、調査区中央で一部平面的に検出した(図52参照)。SD18595Bは、見切石列SX18600に平行し、下層のSD18595AやC期のSD18595Cと比べて約50cm北に設定される。

C期(Ⅰ-4期)

広場を上層礫敷に改修する時期である。

広場S H18590C 中層礫敷の上面に灰茶色砂質土を約5



図53 見切石列SX18600(南西から)



図154 南雨落溝SD18596 B検出状況(西から)

cm敷いて盛土をほどこし、中層礫敷よりもやや小振りの径約1～2 cmの礫を敷く。中層礫敷にともなう見切石列SX18600の南約50 cmにあらたに拳大の見切石列がおかれ、上層礫敷の南を限る境界とされた。

S D18595 C 広場の改修にともない、北雨落溝もさらに掘り直された。幅約50 cm、深さ約15 cm。調査区を東西に貫き、東西に延びる。第296次調査のSD17941 B、第337次調査のSD18510 Bにあたる。

S D18596 B 第296次調査のSD17965と一連のもの。幅約45～70 cm、深さ約15 cm。調査区の東でとぎれ、第337次調査でも検出されていないが、削平により失われた可能性が高い。なお、当初から礫詰暗渠であったか、上層の礫敷SX18596 Bが敷かれた際に溝が埋められたものか判然としない。また、この溝の時期は不詳であるが、B期もしくはC期に属すると推測される。

D期(Ⅱ期のごく初め)

南面築地回廊を解体する時期である。回廊の解体にともない基壇上部が削平され、礫敷広場ができる。ここでは解体にかかわる遺構を概観する。

築地回廊SC7820の礎石と基壇外装はすべて抜き取られる。礎石抜き取穴は径約0.5～1.0 m、深さ約10～15 cmのみ残存している。また、回廊基壇北側で外装抜き取溝を検出した。幅約50 cm、深さ約15～25 cm残存。東で溝の幅が広く、地形の傾斜に即して、西側ほど残りがよい。

なお、基壇上にみられる南北溝SD18593は、幅約25 cm深さ2～5 cmで南へ流れる溝である。E期の礫敷の下層で検出したもので、築地回廊解体時の遺構と思われる。



図155 瓦溜り S X18585 検出状況(北東から)

基壇上面を一部削平した際に掘られた排水溝などの可能性があるが、詳細は詳らかにしえない。

瓦溜り S X18585 築地回廊基壇の北辺にあり、C期の北雨落溝SD18595 Cを埋める。南北は最大で3.7 m、東西は調査区全体に及び、第296次調査で検出された瓦溜りと一連のものである。瓦層の厚さは最大で約15 cmを測る(図155)。遺物の項で述べるように、解体にともない不要となった回廊所用瓦を廃棄した遺構であろう。

E期(Ⅱ期以降)

S X18580 築地回廊廃絶後に、それ以北の旧大極殿院内庭部分全体に敷かれた礫敷である(図157)。SX18581とともに、Ⅱ期の宮殿施設前面に広がる一連の空間として利用されたい。暗茶褐色土のベースに径5 cm程度の礫が敷き詰められ、一部瓦片を含んでいる。第296次調査のSX17943、第337次調査のSX18511と一連のもので、調査区の西端でSX17943の一部を再発掘した。『平城報告XI』のⅡ期・Ⅲ期の礫敷であろう。本調査区では、もとの築地回廊基壇と大極殿院内庭部分であわせて約12 m分検出した。それより以北では、径5 cm程度の礫と瓦片を多く含む茶灰白色土が確認でき、礫敷に対応する層と推測される。検出した礫敷の北端約1 mでは、茶灰白色土が礫敷の上面を覆っている。これは、北側からの土砂が堆積したものと推測され、礫敷SX18580が中世頃まで露出していたとする既調査区の見解とも矛盾しない。

S X18581 築地回廊南側、朝堂院広場に敷かれた礫敷である(図157)。この礫は基壇整地土最上面の礫とは異なり、残存する基壇から約1.5 m南から始まる。ここから、基壇

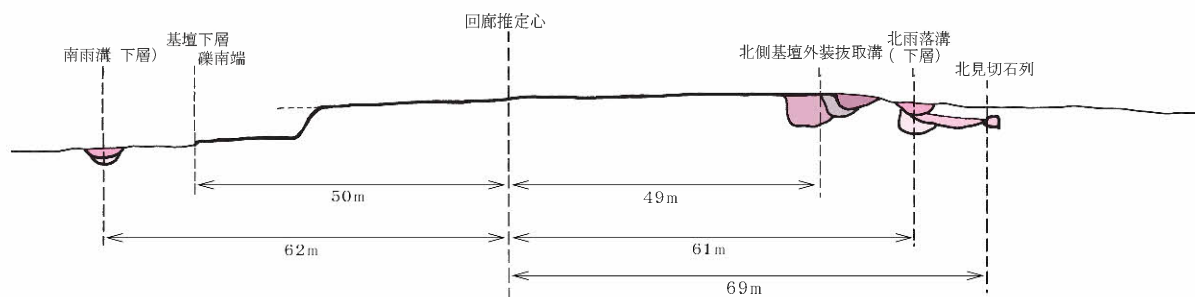


図156 南面築地回廊遺構模式図

の南端を推測できる。基壇部分の礫は、橙褐色粘質土のベースに径約70～25 cmの礫であるのに対して、朝堂院広場の礫は径約5 cm程度と概して小さく、築地回廊の瓦と思しき瓦片を多く含む。SX18581は平面では判然としないものの、A期以降の礫敷上に直接礫を敷いたものと推測される。また、検出状況からみる限り、SX18581は、基壇が後世に削平される以前に敷かれた礫である。したがって、この礫敷は、奈良時代後半に属する遺構である可能性が高まった。なお、本調査区内SX18581からは、奈良時代の遺物のみが出土したが、第296次調査では中世の瓦器片が出土しており、この礫敷も比較的長期にわたり露出ないしそれに近い状態にあったと思われる。

時期不明の遺構

土坑S D18594 築地回廊基壇南東で検出した。性格は不詳。染付片が出土したことから近世以降に属する遺構であろう。(山本 崇)

平面規模と柱間寸法

築地回廊SC7820にともなう遺構を模式的に示したのが図156である。今回の調査では、後世の削平により回廊南柱列心が特定できず、回廊推定心の算出ができなかったが、第296次調査と一連の遺構であるため、回廊推定心の座標は第296次調査の所見を踏襲した。また、南北雨落溝および基壇下層の礫南端は、調査区東西断断面ならびに中央の断断面の平均値とし、下層の南雨落溝に関しては、西壁断面での計測値、北見切り石列は検出遺構の南面上部の平均値とした。北側基壇外装抜取溝は、B期におこなわれた基壇外装据替の際の、地覆石抜取溝の南端とした。

これによると回廊推定心より北側基壇外装抜取南端までの距離は約4.9m、基壇下層の礫南端までの距離は約5.0mとなり、南北基壇幅は約10m以上となる。基壇外装の幅を約1尺とすると、回廊基壇南北幅は少なくとも約10.6m以上の値をえる。

なお、回廊推定心より下層の北雨落溝、南雨落溝までの距離は、それぞれ約6.1m、約6.2mとなる。また、回廊柱間は、桁行約4.6m、梁間約3.5mで、これまでの南面築地回廊の所見とほぼ一致する。(大林 潤)

4 遺物

土器

出土した遺物の量は、整理用コンテナにして3箱分と少ない。とくに古代のものは細片が多く、図化しえるものは図158に掲げた程度である。

1は第337次調査の際、多量に木簡が出土した黒灰砂質土から出土した土師器杯A。底部外面へラケズリ、体部外面ヨコ方向のへラミガキ、内面には2段に放射状の暗文が施されている。これらの特徴は平城Ⅰの段階のものであることを表しており、大極殿回廊の建設がこの段階に行われたことを追認するものである。

2は回廊基壇を断ち割った下層の整地土から出土した須恵器長頸壺破片。肩が張り、稜をなす壺Kで、外面屈曲部直上に沈線が回る。外面上半だけでなく上方の破面に漆が厚く付着していることが注意される。漆を入れて運んできた後、口頸部をはねてそこから漆を掻きだして使用したものと考えられる。回廊建設時に使用したのち、



図157 礫敷S X18580・S X18581(南西から)

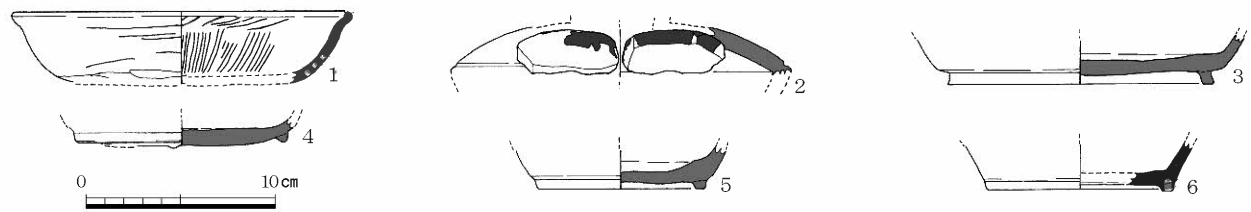


図58 第360次調査出土土器 1 : 4

廃棄されたものであろう。

3 もやはり 整地土から出土した須恵器杯Bの底部である。体部と底部の境よりやや内側に寄った位置に取り付いた外側に踏ん張る高台をもち、やはり奈良時代初期のものともてよい。

これらに対して、4 の朝堂院広場SX18591 礫中から出土した須恵器杯Bは、高台はやや摩滅しているとはいえ矮小化したもので、その取り付け方からも平城ⅠやⅡまではさかのぼりにくいように思える。

さらに、築地回廊廃絶後の礫敷SX18580から出土した須恵器杯Bの5と6になると、体部外形や高台の形態から平城Ⅴ以後の新しい時期のものとも判断される。長岡遷都頃に埋まった資料であろう。（高橋克壽）

瓦磚類

出土した瓦磚類は表23のとおり。軒瓦はいずれも平城瓦編年のⅠ期前半に属する。6664B・Cは6284Cと組んで第一次大極殿院の主要な軒瓦の組み合わせとされてきた。今回の調査では6664Bがまとまって出土している。熨斗瓦、面戸瓦が数多く出土しているが、これは第一次大極殿院築地回廊周辺にみられる従来の傾向と一致する。熨斗瓦はいずれも凹面に杵板痕を残す。この点は本書32頁の別稿を参照いただきたい。鬼瓦は平城宮式鬼瓦Ⅰ式Aである。

SC7820北側の瓦溜りSX18585出土の一括資料について詳しくふれる。ここから出土した丸・平瓦や道具瓦は、いずれも暗灰色から黒灰色を呈し、胎土は精良で製作技法も共通性が高い（色調は、本書33頁の別稿参照）。そしてこれらの特徴は、同じ瓦溜りから一括出土した軒瓦（いずれも瓦Ⅰ期前半）とも一致するため、SX18585出土の瓦磚類一括資料全体が軒瓦と同じ瓦Ⅰ期前半のもの、つまり第一次大極殿院南面築地回廊造営当初の所用瓦である可能性を強く示唆する。

今回の調査区の東には西楼SB17800が隣接し、出土位置から見ればその所用瓦が一部混入したおそれも考えられる。しかし、西楼を検出した第337次調査では、西楼所用の隅木蓋瓦や奈良時代中頃の軒瓦、恭仁宮式刻印瓦等も出土している。これらと比較すれば、瓦溜りSX18585

表23 第360次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6284	A	1	6641	E	3
	C	2	6664	B	15
	?	2		C	2
	C	1	6668	A	9
型式不明	奈良)	19	古代		1
型式不明		5	型式不明	奈良)	5
			型式不明		8
軒丸瓦計		30	軒平瓦計		43
丸瓦			平瓦		
重量	192.8 kg		重量	578.3 kg	0.3 kg
点数	2377		重量	9207	1
道具瓦					
鬼瓦		1点	熨斗瓦		14点
			面戸瓦		92点

出土瓦磚類との違いは明らかであり、西楼所用瓦の混入はほとんどないとみてよいだろう。（清野孝之）

木器・金属器

東端の断割トレンチで確認した整地土から燃えさしが出土している。また、SX18580をおおう黄灰褐色土から永楽通寶が1点出土した。

5 まとめ

今回の調査で、大極殿院南門から西南隅にいたる南面築地回廊西半の発掘が完了した。本調査区と対称の位置にあたる東南部分の一部除いて、南面築地回廊東半もすでに調査されていることから、その全貌が明らかになったといえる。本調査の成果は次の通りである。

第一。南面築地回廊の柱位置と柱間がほぼ確定した。遺構の残存状況に恵まれず、すべての柱位置を確定することはできなかったが、推定される回廊心、桁行・梁行寸法について、これまでの知見を追認できた。

第二。内庭広場の変遷が明らかになった。とりわけ、西楼の増設にともない内庭広場の礫敷が西楼にとりつくかたちで上昇することは今回の調査ではじめて確認された。また、南面築地回廊に沿って内庭広場の中層礫敷にともなう見切石列が検出された。

第三。築地回廊南の朝堂院広場では、二面の礫敷が確認され、奈良時代に属する礫敷である可能性が高まった。

これまでの調査が解明してきた施設の変遷とともに、内庭の変遷と機能を含めた議論が望まれる。今後の調査の進展にまちたい。（山本）